



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	道に迷った旅人
Author(s)	ホセ, マリア・メリーノ; 鈴木, 正士 (訳)
Citation	琉球大学欧米文化論集 = Ryudai Review of Euro-American Studies(62): 51-70
Issue Date	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42977
Rights	

道に迷った旅人

ホセ・マリア・メリーノ著
鈴木 正士訳

土砂降りの雨が道路を激しく叩いていた。風に煽られた大粒の雨は、水銀灯に照らされて白くけむりながらアスファルトの上に降りつついていた。

その時、出し抜けにひとりの男が現れ、彼の目の前で立ちどまった。建物の軒先に雨宿りしていた彼は、条件反射のように後ずさりすると、身構えた。

男は、右手に小さな旅行かばん、もう一方の手に布製のバッグをさげていた。髪から首にかけてしたたり落ちている雨の滴は、男のマフラーやレインコートの襟を濡らし、レインコートには水がすっかり染みこんでいた。

「あのう」と男は言った。

彼はぎょっとして返事ができなかった。男は目を大きく見開いて彼を見つめた。雨の滴が二筋眉の下まで垂れ、男の額は光って見えた。

「あのう」と男はふたたび言った。男の着ているレインコートの袖口からも水がしたたっている。

「なにか?」と彼は答えた。

「道に迷いました」と男は言った。男は走ってきたばかりのように息を弾ませている。

「道に迷いました。北駅に行きたいんです。正午の列車に乗らないと・・・」

「遠いですよ」と彼は答えた。「タクシーで行かれたら」

「走っていないんです」。急に男は声を荒らげた。「1時間も探しているのに、1台も走っていないんです」

「そこに地下鉄の駅があります」と彼はとっさに言った。そして、通りの突

き当りを指さした。しかし雨がはげしく降っているため、ほんの少し先も見えない。

「この通りを少し行ったところです」

男のまなざしから、男がまだ不安な思いを拭えずにいることが、彼にはわかった。

「このあたりは初めてなんです」と男はつぶやいた。

「駅の階段は長いですよ」と彼はこたえた。「急いでください。30分はかかります」

すると男は、ぼそぼそと礼を言いながら、雨の中に飛び出した。

彼は買い物ですませ、スタンドで手に入れた新聞を持って家に戻ったが、道に迷ったあの旅人の素振り——パニックでひきつった顔とおびえたまなざしと口ごもった話し方——のどれもこれもが脳裏から離れなかった。その日の午前中は、最近10年に出版された小説に関する原稿を仕上げた後、メキシコの学士院会員のインタビュー記事をパソコンに打ち込んだ。昼食は、雨が止まなかったので家でとった。午後は、出版社で雑誌の編集会議に追われた。そのあいだ一日中、道に迷った男の表情は彼の記憶のなかで薄らぐことはなかった。

帰宅した8時半には妻のベルタはいなかったが、少したってから、帰りは遅くなるという電話があった。彼は水割りを作ると、リビングルームのソファに横になって、ついていないテレビの画面を眺めた。

雨の滴をしたたかせ不安に歪んだ男の顔が、彼の心にこびりついていて。それは、まるで幻想小説の一場面のようにであった。

彼は立ちあがり、ノートとボールペンを取ってくると、走り書きをした。

知らない町をさすらう男。

男は緊張しながら

初めての町をさまよっている。

10時少し前、ベルタからまた電話があった。

「あと10分ほどで帰れるわ」と彼女は言った。

彼は2杯目の水割りを作ると、机に向かった。パソコンを立ち上げ、USBメ

モリーをさしこみ、キーボードを叩きはじめた。しばらくそうしていると、頭が冴え、物語のプロットが浮かんできた。彼は興奮した。幸せと言ってもいい気分であった。

男は夕暮れ時の町を歩いていた。遠い国からやって来た、どこにでも見かける旅人である。宝くじのはずれ券や枯葉や吸い殻が風に巻き上げられている街を、男は初めて歩く。男の瞳にはすさんだ気持ちが色濃くうかがえた。そのためすれ違う者たちは、男を見るとき驚きを隠しきれない。物売りや物乞いでさえ、奇異の目で男をながめ、声をかけるのを躊躇するほどだ。

男は歩いているのではない。さまよっていた。両手をポケットに突っ込み、少し前かがみで、ふらふらと町をさまよっていた。時々ショーウィンドーの前で立ち止まるが、陳列品を見るためではない。ガラスの表面を見つめている。ショーウィンドーに映った自分の姿を見つめていたのだ。そうすることがまるで自分自身の存在を確認することであるかのように。

1時間ほどパソコンに向かったあと、彼は書き上げた文章を印刷し、空のグラスを持ってリビングルームに戻った。心は満たされていた。頭のなかではまだ物語の続きを書いていた。そのため、テレビをつけたが集中できなかった。画面のなかで動く映像を見ているあいだも、旅人の苦悩について考えつづけた。旅人といっても、今朝彼に道を尋ねた男ではない。彼が書きだした物語の主人公の方である。

「男は不吉な予感にとら囚われている」と彼はつぶやいた。「恐れおののいている。まるで恐ろしい事件が今にも彼の身に降りかかろうとしているかのようだ」

11時半を過ぎたころ、ベルタは帰宅した。彼が4杯目の水割りを飲んでいいたときだった。彼女は怒ったような不快な表情をしていた。身体全体から疲労感がにじ滲みでていた。

「キスしてくれないのかい？」と言いながら、彼はベルタを抱きしめた。

「ずいぶん飲んだのね」

「創作していたんだ」

ベルタは彼を見たが、何も聞こえていないかのようにだった。それから寝室に行った。そしてコートを脱いで現われると、スカートを下ろしながらバスルームに入った。すぐに威勢のよい放尿の音と大きな安堵の吐息が聞こえてきた。

「聞こえなかったのかい？」と彼は言った。「物語を書いていたんだ」

彼女はバスルームから出てきたが、スカートはすでに脱いでいた。そして寝室に向かいながら洋服を脱ぎつづけた。

「食事はすんだの？」と彼女は言った。

「いや、まだだよ」

「わたしもよ。今まで休みなしだったの。何かある？」

彼は肩をすくめ、おやおや、と思った。

「何でもございますよ」と彼はこたえた。

翌日も二人が家に揃ったのは夜遅い時間であった。手帳を眺めていたベルタは彼に顔を向けると、言った。

「物語？」

「きのう言ったよ。聞いていなかったんだ」

「きのうはくたただったの。本当にやってられないわ、あんな意味のない会議」

彼女は煙草に火をつけると、最初の話題に戻った。興味を引かれていたのだ。

「それで、物語を書いていたのね」

「うん。仕事は山積しているのにね。きのうの朝、濡れねずみの男を見かけて、ひらめいたんだ」

「どんな物語？」

彼はプリントアウトした原稿を持ってきた。

「まだメモ程度だよ」と彼は言った。「生まれ故郷から遠く離れた町を、男が一人歩いている。男は、その町で迷い、誰かに追いかけているかのように

怖気づくんだ」

彼は創作中の物語を読んで聞かせた。読み終え顔を上げると、ベルタは彼をじっと見つめていた。物語に引きつけられた様子だった。

「どうだい？」

彼女は何も答えなかった。

「たぶん男を追いかけてくる者などいない。男の恐怖は、男の内部から生じている。それは男の心に宿る亡霊だ」と彼は言った。「苦勞の多い人生を歩んできた男は、今は各地を旅してまわる仕事についている。日々滞在する町や環境や気候までが変わる。旅の速度は増すが、あいも変わらず男は旅をつづけなければならない。不快な思い出は男の心にこびりついて離れない。それゆえ、得体のしれない不安感が男の内部に増殖していく。男は恐怖を感じている。いつか知らない街角で、宿泊しているホテルに戻れなくなるのではないか。自分が誰なのかさえわからなくなるのではないか。移動する毎日の生活環境に飲み込まれてしまうのではないか。その環境は、男に対して不機嫌な態度をとっている。そして、男の心に巢食う苦惱を暗い情念で染め上げるには最適な環境なのだ」

「それから？」とベルタは訊いた。

「先はまだ考えていない」と彼は答えた。「これからじっくり考えようと思う。迷路を進むように行きつ戻りつ、たたいたりこねたりしながらね。物語を考えることは、ぼくには苦じゃあない。むしろ、ぼくの気持ちを静めてくれる。まるで男の不安の原因を考えることが、ぼく自身の不安を取り除いてくれるみたいだ。実は、ここ数か月あまり調子が良くないんだ。でも、頑張るよ」

ベルタはうなずいた。

「わかったわ。頑張ってるね。でも、あんまりひどい目にあわせないでね」

「ひどい目って？」

「あなたの創造した男に」

彼は不意を突かれ、まごつくが、

「さあねえ。男に何が起こるかねえ」と空とぼけると、二人は笑いだした。

3月の月末、彼は批評家たちの会合を記事にするよう依頼された。そのあと、たてつけに仕事が舞い込んだ。そのため彼は、物語のつづきを書くことができなかった。一方ベルタは、道に迷った旅人の物語を忘れてはいなかった。何度も、あのと男はどうなったのか、彼に尋ねた。その質問は彼をいささか動揺させた。

「時間がなくてまだ考えていないんだ」と彼は答えた。

ベルタは小さくウインクした。今まで何していたのと言わんばかりだ。そのあと彼女は皮肉めいて微笑んでみせるが、咎めるまなざしは完全には消えなかった。

「まだたたいたりこねたりしている、ってわけね」

ある夜、彼はベルタの叫び声で目をさました。のろのろと手を伸ばし、ベッドサイドの灯りをつけた。すると隣のベッドから、恐怖で顔を引きつけてベルタが彼を見ていた。彼は、彼女の苦悶の表情に仰天した。そして、シーツをはがし彼女の横に入ると、彼女を抱きしめた。

「どうしたんだ？ 何があった？」

ベルタの額は汗でぐっしょり濡れ、目には大粒の涙があふれていた。彼女は肩で大きく息をしながら、興奮した声で話した。

「誰かがわたしを見ていたの。ここでわたしを見ていたの。男だった。わたしの目の前で、残忍な表情で男がわたしを見ていたの」

その夜から毎晩、恐怖に引きつったベルタの声で彼は起こされた。彼女は毎回、自分の顔のすぐそばに怯えた目をした男の顔があった、と言った。軒の低いみすばらしい家が立ち並んだ、埃っぽいくすんだ通りに、男はいるの。

とうとうある夜、ベルタは叱責する口調で彼に言った。

「あなたの書いている物語の男よ。不安におののいている、道に迷った旅人よ」

彼は返事ができなかった。

「男を出してあげて」

ベッドサイドの灯りを消しても、彼は動揺を静めることができなかった。ベ

ルタはまんじりともしない。

「そこから出してあげて」と彼女はまた言った。

彼は上体を起こし、暗闇のなか彼女に向かって語りかけるが、彼女がすぐそばにいとわかっていながら、漠然とした恐怖を感じる。

「わかった。出してやるよ。だから、もうおやすみ」

だが、彼女は納得しない。

「そこから、男を出してあげて」

「落ち着いて、ベルタ。出すって約束するから」

「どんなふうにも？」

その時、ある考えが突然、しかし緩慢に彼の頭に降って湧く。まるで、彼の心の奥底で待ち構えていたものが、急に浮かび上がってきたかのように。

「出会うんだ。ある人と出会うことで、男は目的地にたどりつける」

しかし結局、彼はつづきを書かなかった。昼間はいつも仕事にかかりっきりで、物語のことを考える時間はなかったし、そうこうしているうちに季節は春になり、夕方から飲み会に参加したり町歩きを楽しんだりするようになったからだ。一方ベルタは、人との出会いが男を不安から解放することになると聞かされて以来、二度と悪夢にうなされることはなくなった。

5月の第2週、会社の予算案を討議するため、ベルタに出張が入った。彼女は会社にも部局間の折衝にも次第に嫌気がさすようになっていた。度重なる会議のため、彼女はひどく疲弊していた。組織再編にあたり部局間で妥協点を模索していたが、力のある局長たちは彼女以外みな男で、彼らが異議を唱えなかった唯一の事項は、ベルタの権限を抑制することだったからだ。

ベルタは出張をできるだけ短くすることはできないものかと思案した。出張先は便の悪い海峡の対岸にある町で、乗り継ぎと待ち合わせ時間を要した。こうして、木曜日早朝出発、金曜日夕方帰着という旅程を組み立てた。

ベルタは木曜日の朝早く出かけていった。彼女がそばにいないことが、その晩彼にはひどくこたえた。

ぎくしゃくした新婚生活といくつかの彼のアバンチュールを経て、やっと夫

婦関係は以前にはなかった安定が見られ、生活は立て直された（ベルタは会社の組織再編の問題を抱えてはいたが）。彼の酒量は減り、喫うものはタバコだけにし、ドラッグはすべてやめた。昼は読書をしたり依頼された仕事をこなしたりした。感情にまかせた言動は影をひそめ、何か月も物語のひとつも書けずにいた時代の、抑えがたい焦りの感情は微塵も感じなくなっていた。

ベルタのいないベッドを目にしたとき、彼は急に不安に襲われた。そこで彼はリビングルームのソファで寝ることにした。まるで、その日一晩だけ彼の家に泊まることになった厚かましい客のように。

翌日の午後早い時間、ベルタから電話があった。彼が外出しようとしていたときだった。彼女が滞在している対岸の大陸の町メリーリヤでは、強風のため午後の航空便はすべて欠航になるかもしれない、ということだった。彼女は疲れた声をしていた。無理もない。帰れそうにないのだ。

「どうする？」と彼は平静をよそおいながら訊いた。

「どうしたらいい？ 今晚 11 時に出航する船ならあるんだけど」

「船？」

「マラガ行きの。そこから飛行機に乗り換えるの。ただ、船は一晩かかるし、海はとても荒れているらしいの」

一瞬沈黙が下りた。それは、まるで交信事故のように、二人を遠く引き離れた。

「ベルタ、ベルタ」と彼はもどかしげに叫んだ。

「聞こえているわ」

「明日は？」

「飛行機なら何便だってあるわ。でも風が吹きつづくらしくて、離陸できないかもしれない。見通しがつかないの」と言ってから、「わたしは大丈夫。ミステリーでも読んで一晩過ごすから」とベルタは答えた。

そして、ともかくまた電話してくれと彼が言うと、彼女はそうするわと言って電話を切った。

結局その午後、彼は外出しなかった。3 か月も前に書きはじめた物語を急い

で仕上げようと、突然思いついたのである。

旅人の男は海峡の対岸にある、周囲から隔離した町に閉じこめられていることにしよう、と彼は考えた。

風は次第に強まり、飛行機は離陸できず欠航がつづいていた。砂ぼこりを含んだ風が新聞紙やビニール袋の切れ端を巻き上げるなか、男は混乱の極みにいた。気をしっかり持とうと男は心を奮い立たせ、旧市街に行ってみるが、いたるところ見捨てられ廃墟となった家並みは男を不快な気分させる。しかたなく男は、空港に戻ってくる。

小さなスーツケースを足もとに引き寄せ、隣の席に手さげかばんを置いて、空港内のいすに、ひとりの女が座っていた。搭乗予定者の列のなかで先ほど男が見た女であった。男は、カウンターの前で係員の説明を聞いている人だけに近づいた。係員は、まもなく本社から最終便の運航に関する連絡が入るだろうと言っていた。しかし、運航は望めそうにないと係員が予測しているのはありありとわかった。

男はまた町に戻りたい気分になったが、しばらくためらったのち、外に出るのはあきらめた。ガラス張りの建物を囲むように植えられている灌木は、風が吹くたび激しくしなっていたからだ。

結局男は、椅子の並んでいるところに行き、女の座っている場所からいちばん近い椅子に座った。そして、女の横顔をみじろぎもしないで眺めた。女もじっと静かにして、両足をぴったり合わせ、膝の上に置いた本に両手をのせていた。それは少し不自然な姿勢だった。おそらく女は不安な思いを静めようとしているのだろう。

男が自分を見つめていることに気づいた女は顔をそむけようとしたが、その時、女の瞳に男の姿が映った。瞬間、女の身に戦慄が走る。まるで男の顔のなかに女をおびやかすものが備わっているかのように。

動揺のあまり女は立ち上がる。ところが、その拍子に床に本が転がった。男はバツの悪さをごまかすため、かがみこんで本を取ろうとするが、女の動きの方が一瞬早く、女は素早く本をつかみ取る。女の態度には明らかに不快な表情

が読み取れた。まるで男に凌辱されたといわんばかりだ。

男も立ち上がると、懸命に平静をよそおいながら女に話しかける。会話の糸口は、彼らを足止めをしている暴風のことだ。そのうち声の調子にも気を配りながら、驚かせてしまったことを男は女に詫げる。そして、不安な時間、女の気をまぎらしてやろうと、たわいない話題を持ち出して男は女と会話をはじめた。

彼は物語を書きながら、ベルタからの電話を夜遅くまで待った。しかし、電話は鳴らなかった。気にしないでおこうと彼はつとめて考えた。なにかささいな事情のせいで彼女は連絡が取れずにいるのだ。待ちくたびれて彼は寝ることにした。今夜もリビングルームのソファがベッド代わりだ。

なかなか寝つけなかったが、やっと眠りについたとき、彼は夢を見た。

彼は建物のひさしの下で雨宿りをしていた。するとまた、カバンを二つさげたびしょ濡れの旅人が彼のそばまでやって来ると、あの日の朝と同じことを言った。

「あのう、道に迷いました」

しかし、雨の匂いも雨の音も銀の糸をひきながら降る雨の様子も、あの朝見た光景よりも、夢の方がずっと生々しく現実感があった。

あの日と異なるのは、それだけではなかった。

彼が男に答えようとしたとき、ベルタが現れたのだ。

彼は彼女に話しかけるが、彼女は、彼には目もくれず、男の方に顔を向ける。そして男をひさしの下に呼び入れると、ハンドバッグから清潔な白いハンカチを取り出し、男の顔や首や手をか^ふいがいしく拭いてやった。

そのとき彼は、ベルタの瞳や表情に、今まで目にしたことのない愛情の発露を見て、身体中に悲しみが広がっていくのを感じる。そして、自分はひとりで雨を見ながら、このまま永遠にこの場所に立ちつづけるしかないのだ、と思った。

夜明け方目を覚ました彼は、物語のつづきにかかった。

道に迷った旅人の男は、空港で女と出会った。女も男と同様、風が止むのを待っていた。天候の不順という話題からはじまった二人の会話は止むことをしらない。そうしていると、最終便は欠航が決まったというアナウンスが空港内にながれた。そこで二人は空港を出て町に向かう。そのあいだも会話が途切れることはなかった。暮らしている町から遠く離れた異郷にいることにくわえ、足止めをくらわされているという特殊な状況は、二人の距離を急速に縮めた。

最初、男は自分の仕事について話す。仕事をはじめたころは、日常的な出張も心躍らす冒険に思えたものでした。隠された秘密を解き明かすようなつもりで、知らない町に乗り込んだものでね。女もまた、働きはじめたころのことを話す。新しいプロジェクトにくわわるとき、いつもわたし、自分はハッピーエンドで終わるおとぎ話の主人公だと思っていたんです。

そして、いつしか男は心の中にふくれあがっている恐怖について事細かに語りだす。一年中旅の空にいと、不安で居ても立ってもいられなくなるんだ。いつか自分の名前を忘れてしまうのではないか。どこかの路地や、日本のキモノや録音機や水晶時計を小商いしている商店が建て込んだ街の片隅で、正気を失ってしまうのではないかって。すると女は、昨年尾を引いている社内のいざこざや駆け引きで心身ともにくたくたな状態なのだ、と打ち明ける。

二人は11時出航の船に乗るつもりはなかった。夜には風は弱まり明朝には飛行機の運航は正常に戻るだろう、と思っていた。そのため一緒に夕食をとったあと、広場近くのカフェで閉店時間まで過ごした。そのころには風はおさまっていた。

町には大規模な軍事パレード用に建設された巨大な円形広場があり、その広場の前に棕櫚しゅろの木が植わった公園があった。公園には、幻影かと思うほどの高い壁が張りめぐらされ、白っぽい遊歩道が伸びていた。

人気ひとけのない夜の遊歩道を歩きながら、さらに1時間ほどおしゃべりをしたあと、二人は、荷物を預けていたホテルに戻った。フロント係は眠気をこらえな

がら、二人に鍵をわたした。二人ともアルコールが入っていたし、しゃべり疲れていたはずなのに、眠くはなかった。その時、女は、みやげにするつもりで買っておいたウィスキーのボトルが部屋にあったことを思い出し、一緒に飲まないかと男を誘う。結局、飲んだりおしゃべりしたりして夜明けまで二人は一緒に過ごした。

海の方角が少しずつ明るんできたころ、女はこれまでの失恋話をいくつか男に語って聞かせる。そして、現在のパートナーとは同志的な感情でつながっていることや、今、実は寂しさをまぎらそうと努力しているのだということを打ち明ける。「それでもさみしくってたまらないの、わたし」

すると男は、女の耳元に顔を近づけ、雨の降る冬の晩、事故で妻を亡くしたと言うと、「事故から立ち直れないんだ」と思いを吐露する。「妻がどうしても忘れられない。あの日のことを忘れることができない」と男はうめく。「心のなかから離れないんだ。加減をしらない悪魔のようにぼくの心を^{さいな}苛むんだ」

その事故の記憶は、脳天を砕いては男の海馬を執拗にかじる獣のように、男の心を^{むしば}蝕んでいた。

朝食のあと、それぞれの部屋にわかれたふたりは、空港に戻るまでの数時間、横になって過ごすことにした。しかし、日が高くなるにつれて風は勢いを盛り返し、ふたたび町中に吹き荒れる。巻き上がった土ぼこりは視界をさえぎり、遠くの山並みがかすんで見えるだけだった。

正午になっても、ベルタから電話はなかった。

物語は書き進んだが、読み返したとき、彼は違和感をおぼえた。創作上の欠陥といってもいい。書きつづけることはできないと彼は判断した。物語の展開は不自然だった。あまりにもありきたりなストーリーでしかない。女がたとえ魅力的な女性であったにしても、女との思いがけない出会いによって男の不安が解消されるはずはないのだ。

土曜の昼下がりだったが、彼は憂鬱な気分だった。パソコンの画面に映っている物語を見ながら、ひどい出来だと彼は思った。物語は彼の思いから逃れて、勝手な方向に転がりはじめていた。

彼は昨夜から果物少しとビスケット数枚しか口にしていなかった。頭は回転せず、うつらうつらしでしたが、物語を書くことは悪魔払いでもあるかのようになり、パソコンから離れることができなかった。この悪魔払いを中断したら、あらゆる苦痛や不運が自分の身にふりかかるかもしれない。

彼は、どこか知らない街角に置き去りにされたかのような思いでいた。いつまでこの寂しさや悪い予感に耐えなければならないのだろうか。時間の緩慢な流れは現実のものとは思えなかった。それにひきかえ、少なくとも物語の方が、彼の意に逆らってはいるものの、リアリティーが感じられ調和がとれていた。

そこで彼は、空港で男が女と話しはじめる場面からストーリーをすべて書き直そうと思った。男の顔を見て女が戦慄したあと、二人の成り行きはまったく反対の筋道をたどるようにするのだ。

会話をはじめるかわりに、立ち上がった女はカバンをつかむなり、あわてて立ち去ることにしよう。こうして二人が接近する機会は永遠に消える。二人が次第に打ち解ける今書いている物語は、出会いを持たない物語となる。男と女はほんの短い言葉をかかわすだけで、すぐに別れる。そして夜の間ずっと、男は女を探し求めるが、女は逃げ、男は女をつかまえることができない。

しかし物語は、彼が考え直したストーリーにしっかりと馴染まなかった。そのため彼は何度も書きかえたが、第一稿に満足していなかったにもかかわらず、書き直したものを読んでみると、二人が出会い親密の度合いを深める方が、離ればなれになるよりもずっとドラマティックで小説的だと、やはり思わずにはいられなかった。

しかし、長時間にわたる二人の会話にはその場しのぎの面が多分にあった。苦しまぎれに彼は、女の顔や表情の裏側に得体の知れない謎が隠されていると男は感じはじめることにしよう、と思いついた。

男と女はもう1日、その町に滞在することになった。ずっと一緒にいたため、二人の距離はさらに接近した。そのことを二人とも好ましく思っていた。

風はおさまらず、飛行機は欠航がつづいた。仕方なく二人は、その夜出航の

船で半島に戻ることに決めるが、混み合っていたため、ツインの船室一つしかとれなかった。

男は、女のなかに自分への深い愛情が宿りはじめているのに気づき、うれしいような怖いような複雑な思いで、心は動揺する。

二人が船内のホールへ行くと、シャンデリアの灯りの下、何人かがダンスを楽しんでいた。しかし1時間もしないうちに、時化のため船は激しく揺れはじめ、立ってられなくなった。踊っていたひとりの客がテーブルの上に倒れ込むと、並んでいたグラスは床に落ち、けたたましい音をたてて割れる。金切り声がホール中に響きわたった。こうしてその夜のパーティーはお開きとなり、客たちは皆船室に下がった。

灯りがぼんやりと灯った二人の船室は、まるで勤勉で幸運な考古学者のおかげで最近発掘されたばかりの古代の地下礼拝堂のようだった。

女はベッドに座ると、靴を脱いだ。うつむいた女の顔に髪がかかった。その時、女の顔や表情に自分の苦悩を解消する真実の鍵を男は発見する。

男にはわかっていた。これが荒唐無稽な夢でないとしたら、目の前にいる女は、死んだと思っていた自分の妻なのだ。事故当時の思い違いや不可解なしつこい妄想のために、妻は死んだと自分は勝手に思い込んでいたのだ。

女が男に視線を投げた。すると、希望は喜びへと変わり、男の顔には見る見る生気がよみがえった。

拍子抜けさせるその展開を考えたのは彼自身だったにもかかわらず、それ以上書きつづける気力を彼は完全に失った。頭のなかで、なにかがいきなりプツンと音をたてて切れた。ぼんやりした状態のまま、彼は物語の最後の一節を読みかえた。作者である彼が考えもしなければ予想もなかった状況に、男は投げ込まれていた。男がそうなる必然性が彼にも理解できなかった。

夜が明けようとしていた。週末夜どおし遊んだ者たちの運転する車が、まだ闇に包まれている町を煌煌とライトをつけながら、断続的に走り抜けていった。

書く気の失せた彼はリビングルームに行ったが、そこで長いあいだ突っ立っ

ていた。物語の成り行きで頭が一杯になり、何をしたらよいかわからなくなったのだ。

どう見ても物語は破綻^{はたん}をきたしていた。

考えれば考えるほど気分が沈み、一人であることが身にこたえた。横になったが、なかなか眠れなかった。やっと寝ついたと思ったとき、早朝9時、突然の電話の音に彼は呼び起こされた。

電話はベルタからだった。彼女は船で半島に戻っていた。睡眠不足と疲労のため、ベルタの声はかすれていた。

「大丈夫かい？」と不安気に彼は訊いた。

「大丈夫よ」と彼女は答えた。しかし、声の調子は素っ気なかった。

「何時に戻れる？」

正午の飛行機に乗るつもりだと答えたベルタは、それから、「あなたにいろいろ話したいことがあるの」と言った。

その言葉の端にとげとげしい妻みを感じられ、彼は問い返すことができなかった。空港で待っていると言うのがせいぜいだった。

電話を切ったあと、不安で居ても立ってもいられなくなった彼は、外に出た。日曜日で町に^{ひとけ}人気はなく、静まり返っていた。輝いている太陽には^{いちべつ}一瞥もくれず、足の向くまま彼は歩きだした。

ベルタのことは考えたくなかった。昨夜見た夢のなかで彼女はたいそう男にやさしかった。あの時と同じ思いを味わうのだ、と不吉な予感に彼は囚われていた。

結末をまだ書き終えていない物語のことも考えたくなかった。

にもかかわらず、二つのことが頭から離れなかった。彼は目を大きく見開いて、ふらふらと歩いた。すれ違うまばらな行人の誰もが、彼を奇異の目でながめた。彼に恐怖を抱いたと言ってもいいだろう。

家からかなり遠くまで来たとき、ベルタの乗った飛行機はそろそろ空港に到着する時間だと気づいた。しかし、空港に向かうかわりに、心に激しく起こっている不可解な衝動に突き動かされて、彼は家に帰った。そしてパソコンを起動し、USBメモリーをさしこむと、必要な操作をおこなって、創作していた

物語『道に迷った旅人』を削除した。

彼はため息をついた。

今回もまた、物語を完成することはできなかった。未完に終わったプロットは心の底にわだかまって、当分のあいだ彼は創作に取り組むことはできないであろう。

ともかく、もう飛行機は到着する。彼は、急いで外に飛び出した。

作者紹介

ここに訳出したのは、José María Merino 著、*El anillo judío y otros cuentos*, Castilla, Valladolid, 2005 所収 “El viajero perdido” である。この短編集には 13 編の短編がおさめられている。

作者であるホセ・マリア・メリーノは、1941 年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティーリャ・レオンの古都レオンに移り住んだ。

マドリッド・コンプルテンセ大学で法学を学んだのち、1972 年詩人としてデビューした。*Novela de Andrés Choz* (1976) 以来、小説家としてこれまで多数の作品を発表している。*La orilla oscura* (1985)、*El centro del aire* (1991)、*Las visiones de Lucrecia* (1996)、*Los invisibles* (2000)、*El heredero* (2003)、*La sima* (2009) などである。ミゲル・デリーベス文学賞 (1996) やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞 (2004) など受賞した文学賞は数多い。2008 年、スペイン王立言語アカデミーの会員に選出された。さらに 2013 年、*El río del Edén* (2012) で国民文学賞を受賞した。2017 年 6 月にはセルバンテス文化センター東京の招きで来日し、「スペイン文学のパノラマ」と題する講演をおこなっている。

ホセ・マリア・メリーノは優れた短編作家でもある。それは、彼が育ったレオンの伝統にも影響されているのではないかと考えられる。レオンでは、冬の長い夜、人々が一か所に集まり、夜なべ仕事をしながら物語を語り合うのが習慣となっていた。その集まりをレオン方言でフィランドン *filandón* という。フィランドンで語られた、冬の寒さや夜なべ仕事の辛さを一時忘れさせるような物語を、ホセ・マリア・メリーノは、短編小説として現代によみがえらせたのである。

作品解説

現実にとって代わる物語

——『道に迷った旅人』に関する考察——

『道に迷った旅人』は、一見、主人公である「彼」の不安な心情を描いた心理小説のように思える。しかし、実は、〈現実〉における〈物語〉のもつ強い力が主題だと考えられる。〈現実〉から創作される、もうひとつの現実=超現実である〈物語〉は、〈現実〉を侵食し〈現実〉にとって代わり得る、ということを作者は示しているのではないだろうか。

ストーリーに沿って見ていきたい。

「彼」は、雨の降る朝、道に迷った旅人の男と出会った。「目を大きく見開いて」不安気に駅までの道を尋ねる男に駅の場所を教えてやると、男は「雨の中に飛び出した」。

男に強く印象づけられた「彼」は、男を主人公にした物語『道に迷った旅人』を書きはじめる。「物語を考えること」は「ぼくの不安を取り除いてくれる」と考える「彼」は、〈現実〉の体験をもとに〈物語〉を創作するのである。

「ふらふらと町をさまよっていた男」を通行人たちは「奇異の目」でながめている、と「彼」は書く。そして、何か不幸が生じるのではないかという「不吉な予感」に男は囚われていると、「彼」は考える。

そして「彼」は、この『道に迷った旅人』のプロットを妻のベルタに話した。すると、ベルタは毎晩、主人公の男の夢を見てうなされるようになる。

彼女の心に男の〈物語〉が侵入していくのだ。ベルタがまず〈物語〉の影響を受けることになる。

男をくすんだ通りから出してあげてという彼女の訴えに、「ある人と出会うことで」その男をその場から出して自由にすると、でませを言って、「彼」はベルタを安心させる。

数ヶ月創作を中断したあと、出張に出た海峡の対岸の町で暴風に遭い帰れなくなったという、ベルタからの電話に「彼」は着想を得て、『道に迷った旅人』を再び書きはじめる。海峡の対岸の町にある空港で暴風のため足止めされた道に迷った旅人はひとりの女と出会う、と「彼」は創作するのだ。

つまり、旅人の男をくすんだ通りから出す「ある人」とは、この女ということになる。仕事に疲れ、生活上のパートナーに不平をもらす出張中のこの女には、ベルタが投影されていた。ベルタという〈現実〉の女性をモデルにして「彼」は〈物語〉の女を創作したのである。

「彼」はベルタからの電話を待つが、彼女から電話はかかってこない。普段とは異なり、いつまでも連絡の電話をかけてこないベルタに「彼」の心は動揺する。その夜、「彼」は道に迷った旅人に会った雨の降る朝の夢を見る。すると、そこにベルタが現れ、旅人に深い愛情を示すのである。それを見た「彼」は悲しい思いを味わう。

夢にはベルタに対する「彼」のかすかな不信感が反映されていた。ベルタとはぎくしゃくした新婚生活のあと関係に安定が見られるようになっていたところだった。

夢に影響された「彼」は、男は女に愛情を抱くようになると『道に迷った旅人』の続きを書いていく。「彼」は〈物語〉の展開に不満を覚えていた。しかし「物語は彼の思いから逃れて、勝手な方向に転がりはじめていた」。「彼」は、現実よりも「物語の方が…リアリティーが感じられ調和がとれて」と感じはじめていた。そして、「不安で居ても立ってもいられない」くらい苦しんでいた道に迷った旅人が、女は亡き妻であると認識し、生気をよみがえらせるという、荒唐無稽な結末で、『道に迷った旅人』を締めくくる。自分の創作した物語の不出来に失望していた「彼」のところに、やっとベルタから電話がかかってきた。船で半島に戻った彼女は、これから帰ると答えると、そのあと、とげとげしい言い方で「話したいことがある」と言う。それを聞いた「彼」は外に出る。

その時の「彼」の描写は、「彼」の創作した男の描写と酷似している。

「不安で居ても立ってもいられなくなった彼」は「不吉な予感」に囚われ、

「ふらふらと歩いた」。そして通行人は彼を「奇異の目」でながめた。

「彼」の生きる〈現実〉は「彼」の作った〈物語〉に組み込まれ侵食されつつある、ということを作者はここで表そうとしているのではないだろうか。だから、〈現実〉において、「彼」は「彼」自身が書いた〈物語〉の中の男と同じ気持ちを抱いたり行動を取ったりするのだ。

そして、女のモデルである妻ベルタは男と親密な関係になっている、と「彼」は根拠のない予感に囚われている。

彼自身の不安を取り除いてくれるはずの〈物語〉は、勝手に動きはじめ、逆に「彼」を不安にさせるのだ。

そのため、突然「不可解な衝動に動かされて」、「彼」は『道に迷った旅人』をパソコンから削除する。

〈物語〉が〈現実〉に取って代わるのを防ごうと、〈物語〉を抹消したのである。つまり「不可解な衝動」とは、〈物語〉による〈現実〉への侵食を押しとどめようとする「彼」の思いから生じたものだったのだ。

〈現実〉から〈物語〉を創作した「彼」は、〈物語〉に影響され脅威を感じている。

そして、その〈物語〉は〈現実〉になりうるということを作者は最後に示唆しているように思われる。「彼」が〈現実〉に出会った旅人の男が「大きく目を見開いて」「雨の中に飛び出した」ように、「大きく目を見開いて」家に戻った「彼」もわが家から「外に飛び出した」という言葉で、作者は『道に迷った旅人』を閉じるからである。「飛び出した」「彼」は、旅人のように、このあと道に迷うかもしれない。

〈物語〉は〈現実〉を侵食し〈現実〉に取って代わる強い力を持ち得るということを、作者は『道に迷った旅人』をとおして示しているのである。